

山の井略 卷四に、わらにふる雪や紺かき。白袴といふ句あり、又崑山集にも此句をのせて、貞徳の句とあれば、古き諺なり、當時の紺屋は常に袴をはきたる故に、此諺ありしならむ

〔甲陽軍鑑十三品第四十上〕信玄公を始奉り家老衆大身小身善惡の儀分別之事、附物の事宜作法手本

に成事、

一或時信玄公仰らる、略 中 扱は息女子などに、よきむこをとらんと存候者、物をたむる侍を見そこなふて、加恩すれば、下劣のたとへに、盗人においをうつと申儀にならん、是には目付の入所也、其目付も盗人の心ならば、いひきかすまじ、略 下

〔飾抄中〕平緒 香略 中

今度予劔裝束又如此、自然相叶先祖所爲、誠是愚者之一得也、

〔明良洪範七〕又馬爪源右衛門ト云士有リ、此士ハ鐵炮ノ名人也、其外總テ武藝ヲ好メド、左文ガ門人ニハナラズ、諸人其故ヲ問バ、只笑テ答ズ、其後左文罪有テ刑セララル、其時源右衛門ノ親敷人ニ云ケルハ、左文ハ劔術ハ名人ナレド、其性質大奸邪也、行々何事ヲ仕出サンモ計難シト思ヒ、門人ニナラズ、師弟トナル時ハ、若奸曲ニ組セヨト云レシ時、組セザレバ、師ニ背キ、組スレバ君ニ背ク、是愚者モ千慮ノ一得也ト笑ハレ語ラレシト也、

〔齊東俗談七世諺〕愚者一得 史記淮陰侯傳、廣武君曰、智者千慮必有一失、愚者千慮必有一得、

〔法然上人行狀畫圖四十五〕俊乘房重源は上の醍醐の禪徒にて、眞言の薰修ふか、りけるが、略 中 治承の逆亂に、南都東大寺焼失のあひだ、このひじりをもちて、大勸進の職に補せらる、すでに造營をくはだつるころ、工の器用をえらばんために、ある番匠をめして、屋をつくらんとおもふに、たるきの下に木舞をうたん事、いかゝあるべきととひ給に、番匠さる屋づくり、いまだ見及候はずと申けるを、おもふやうあり、たゞつくれといはれければ、あるまじき事しいで、傍輩にわら